

# 郷土室だより

第118号

平成16年2月1日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 15-036

## 「続」中央区の「橋」

(その18)

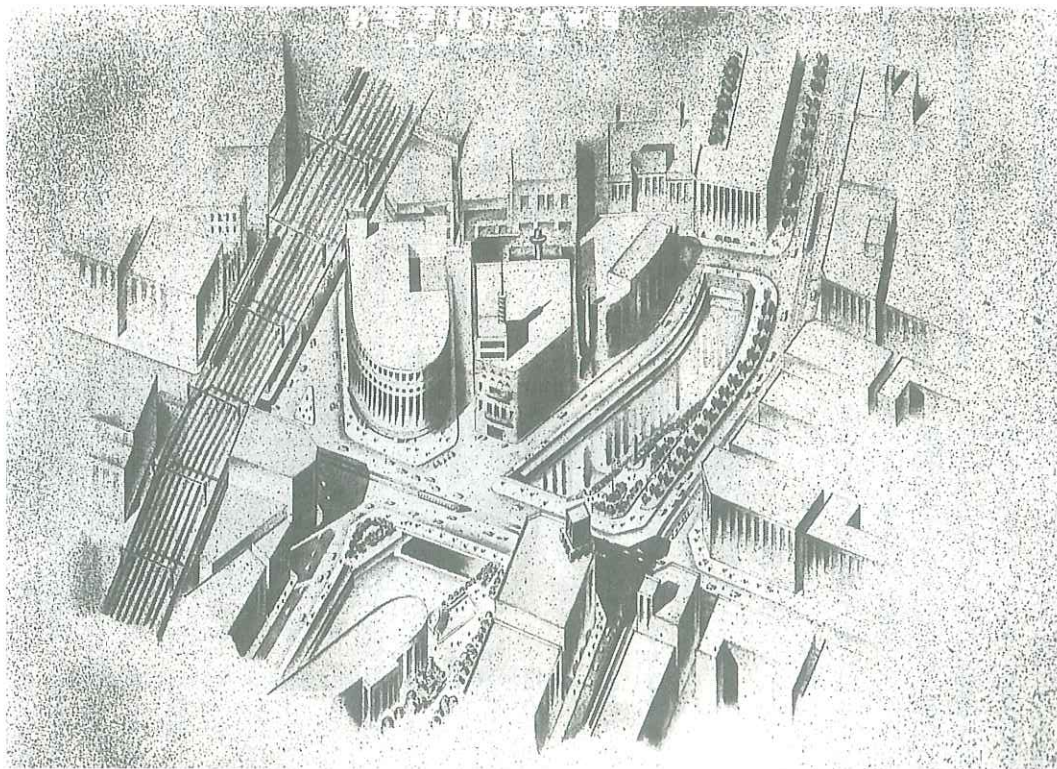
◇君の名は

これまでの数回は江戸初期のウオーターフロントだった木挽町を中心とした橋の話が続けましたが、今回は太平洋戦争を挟んだ時期の数寄屋橋とその周辺の「水路」の話になります。

まだテレビというものがなかった時期の昭和二十七年四月から翌々二十九年（一九五二〜五四）の四月までNHK連続放送劇「君の名は」（菊田一夫作）は《空前のヒット作》だといわれ、放送が始ると銭湯がガラガラになったといわれています。その始まりは空襲下の数寄屋橋上の若い男女のふれあいから始まりました。

それをメロドラマ映画化した松竹の「君の名は」三部作もヒットを続け、ラブロマンスと《すれ違い》で繋がれたストーリーと《真知子巻き》というファクションが一世風靡しました（主演は佐田啓二・岸恵子）。

この事実は四百年前の「江戸開府」と同じ年に歌舞伎が誕生したこと、同じ現象が二十世紀後半になっても《繰り返して》て現れたように思われます。つまり社会の大



変化の時期には、その変化にふさわしい芸能や風俗が生まれるということです。

さらにこのドラマのおかげで、俗に「江戸城三十六見附」と呼ばれた城門とその橋の一つである数寄屋橋の名が、全国的に知られるようになりました。いろいろな数え方があるにしろ、奇しくも「君の名は」が誕生してから今年で五十年を迎えます。

念のために付け加えておくと「君の名は」の時期の数寄屋橋とは、都心の丸の内・有楽町を経て、東京最大の商店街である銀座を結ぶ橋でした。現在は晴海通りの西端のショッピングセンターとして、名物ビルが建ち並ぶ地域の一角をなしている場所です。かつての橋の下の水面は跡形もなく、その場所の殆どは自動車専用道路になっています。

始めから結論を種明かししますと、この号で取り上げる事柄は、戦前の外濠埋立計画とはこの数寄屋橋付近の水面だけを残して、他の大部分の濠を埋め立てるという計画でした。

### ◇外濠埋め立て

今はない数寄屋橋が架けられていた水路は、江戸城の東側の外濠として幅の平均は約三九メートル、長さは現在の呉服橋交差点から東京高速道路株式会社線の土橋入り口までの約二・三キロメートルの範囲のものでした。

この間の城門としての施設があった場所を列記しますと呉服橋門・鍛冶橋門・数寄屋橋門・山下橋門・土橋の対岸にある幸橋門がありました。この濠はすべて地盤の固い江戸前島に幕府が全国の大に命じて掘らせた、いわゆる天下普請で出来た水路でした。その水路の西側（城側）には水面から七・八メートルの高さの石垣が築かれましたが、東側の現在は中央区の範囲の町人が居住する区域に面する場所は、すべて船付き場（河岸）になっていて、江戸市街地での物資輸送の大動脈の役割を果たしていました。

太平洋戦争後にこの大動脈は「戦災残土（焼け跡の瓦礫のこと）」の手っ取り早い処理方法として、その捨て場となって埋め立てられ

て自動車専用道路・東京駅八重洲口とその関連ビル、そして地下商店街・地下自動車道路・地下駐車場などの都市施設が建設されました。

この辺の事情については、私の体験としては『中央区三十年史』（中央区・昭和五十五年刊）上巻）第二編「中央区の三十年」を執筆の際、「地域の性格の変化」を象徴するものとして、その章のなかに「2 水運と自動車(1)水路の埋立・(2)都市改造」という節と項目で、この外濠埋立について入手できる限りの資料を盛りこんでその経過を明らかにしました。

なぜ手っ取り早い処理で外濠を埋めなければならなかったのかという事柄についても、占領下という特殊事情と、当時の深刻な物資不足（トラックやその燃料は殆どなかった）という状況では、その方法が唯一のものだったことなどを記述しました。

### ◇未見の資料

ところがつい最近、外濠埋立計画は必ずしも「占領下という特殊

事情」のためではなく、戦前（推定昭和十一年―一九三六年）にも東京市の中で埋立計画が立案されていたことを立証する資料があったことが分かりました。二十三年前に『中央区三十年史』に執筆した文章は誤りではないのですが、少なくともこの資料を見ていれば表現のし方もより正確になったことと思われまます。そうした反省を含めてこの中央区京橋図書館の「郷土室だより」という最適な場所を借りて、私が取上げられなかった資料のおおよその内容を紹介する事にします。

その紹介の前に、ここでも付け加えなければならぬことがあります。又もや私事になりますが私は昨年『図説江戸・東京の川と水辺の事典』（柏書房刊）を上梓しました。幸い新聞やいろいろのメディアでの書評などにも恵まれました。それよりも有り難いことは読者の方々から直接寄せられた感想や指摘が思いの外に多かったことでした。それだけ東京の川と水辺に関心を寄せられる方が多いことを今更に知らされました。

そのなかに練馬区にお住まいの

鈴木浩之氏から「この本を読んで大学のポート部にいた間は東京の川を漕ぎ回っていた事を思い出した。ぜひ同窓会で東京の水辺について話を聞きたい」という意味の講演の依頼が有りました。

講演どころか実際にポートで少なくとも四年間は東京の川を「体験」した方々のお話は貴重なものと思われます。私としたならば逆にお話を拝聴に罷り出なければならぬことなのですが、健康上の都合があつて残念ながら辞退させていただきます。

そうした文通の後に思いがけなく私としては「未見の資料」である東京市監査局都市計画課編『河濠整理計画』を鈴木浩之氏から頂くことになりました。この資料は私有するよりも京橋図書館で所蔵し広く利用されることを考えております。

◇資料の説明

資料の体裁

仮綴・表紙のタイトルは「河濠整理計画」。この文字及び本文は謄写版印刷。

編者・東京市監査局都市計画課 構成 第壹編「外濠ノ環境ト対策」、第二編「河濠整理計画現況調査書」、第三編「河濠整理計画説明書」という順に「編」を立ててそれぞれの調査結果を掲載しています。当然、現在から見ても興味ある内容で目次もあるのですが、ここではこの資料の復刻が目的ではありませんから、第壹編の「結論」でこの計画の目的を明らかにしている部分だけを紹介する事にします。

結論

以上述ブル所ヲ綜合シ之ガ結論ヲ求ムレバ大体ニ於テ左ノ如キ断定ヲ下シ得ルモノノ如シ、即チ

交通上価値鮮ク史蹟上存在ノ影薄ク、衛生上害アリ、美観上価値ナキ外濠ハ現状ノ俣存置スルヲ許サズ、之ガ改善ノ急務ナルヲ認ム、改善スルトセバ他河川ノ浄化用水ニ支障ナキ様一部ヲ暗渠トシテ残置シ他部ヲ埋立テ快適ナル施設ヲ以テ代ラシム、之ガ施行ノ時期ハ鉄道増設、東京駅裏口改良工事ト併行シテ施行スルヲ最便トスベシ、  
というものでした。東京市監査局

都市計画課という公の組織が、こり・美観上価値なし」という極論  
れも東京市の事業として刊行中だ  
った『東京市史稿』の成果や、そ  
の担当者であつた東京市史編纂員  
の「言」(見解)を聞いた上での結  
論が「交通上の価値少なく・史蹟  
としての影薄く・衛生上害があ  
り・美観上価値なし」という極論  
を出した上で、早急に埋立を実施  
すべきだと主張しているのです。  
この結論が出された約半世紀後  
から現在では外濠埋立地全域にわ  
たって、再開発の前提として遺  
跡・遺物包含地帯であるとして、

左側の丸屋根が戦災前の東京駅降車口（現在の丸の内北口の屋根）です。まだ八重洲口はできていません。



鍛冶橋より東京駅裏側を望む（「河濠整理計画」より）

考古学的手法による調査が行われるようになりまし。またその報告書も大金を費やして刊行され続けています。この現象は学問の進歩の結果、社会的関心が深まったことによるものなのか、都市計画

による再開発の手段における一つの手続きとしての作業なのかは、これも「歴史」の経過を見ないと何とも言いかねないものを感じます。

そうした感想はさておき、図版としては八枚の江戸図写真(キャビネ版)、十枚の昭和十年前後の外濠とその兩岸の風景写真(手札版)、そのインデックスとしての手彩色の地図一葉。その後には「数寄屋橋附近整理完成後ノ鳥瞰図」という写真(印画紙)が台紙に張りこまれたものがあります(表紙と前頁の図と写真)。

各写真(印画紙)には薄紙が当てられているという丁寧な扱いが特徴です。現在ならば何の事もないありふれた作業のようですが、推定昭和十一年当時の写真事情の片鱗を知るものとしては、非常に手間ひまをかけたもので金のかかった作業だという事が分かります。当然、商業出版物ではなくて

当時の東京都市計画の意志決定に關係する人々に配布された資料のように思われます。

#### ◇発行時点の推定

次にこの資料が作成された時点をも「推定 昭和十一年」とした理由を述べます。

第貳篇「丸之内附近河濠整理計画現況調査書」に添付された第壹表「航通調査表」の調査日時は「昭和九年九月二十五日自午前八時至午后四時」の間に常盤橋・呉服橋・鍛冶橋・有楽橋・久安橋・三原橋・新橋の七地点に伝馬船・汽艇・小舟が合計二六五隻が航通したことを記録しています。

第貳表「水質試験報告書抜粋」(衛生試験所発表)の調査月日は「自昭和九年六月二十二日至同年五月二十八日一ヶ年間」の有楽橋・水道橋・両国橋・千住大橋四カ所の月別満干潮時の水温・透視度・水素イオン濃度(PH)・蒸気残渣・顕微鏡的試験(四項目)・臭気(二項目)・腐敗度(四項目)のデータがあります。これらの「試験項目」の殆どは方法は変わっていて

も、現在も踏襲されている項目であることも興味あることです。

この調査期間の終了日は昭和十一年五月二十八日だから余程緊急な場合の他は、たいていは翌年度に発表されるのが官公庁の仕事の通例といつてよいでしょう。それゆえにこの「河濠整理計画」は昭和十一年度中に作成・配布されたものと推定したわけです。

#### ◇数寄屋橋附近整理完成後の鳥瞰図

数寄屋橋を中心としますと橋の南に泰明小学校、その右側にマツグランビル(現阪急デパート)が数寄屋橋交差点にくっきりと影を引いています。その上(北側)には出来たばかりの数寄屋橋公園が残された外濠の水辺に沿って見えた風景でした。なお設計図では泰明小学校に面した範囲まで水面が残される計画のようですが、鳥瞰図では数寄屋橋の橋の下までが水面のように描かれています。

水辺の北端は丸之内橋、数寄屋橋公園の対岸には邦楽座・朝日新

開社、橋に面した円い建物が日本劇場略して日劇、その西側に国鉄線の高架線が見えます。JR線を除いてこの鳥瞰図に描かれた建物の中で原形を残しているのは泰明小学校だけということに改めてびっくりしています。

この東京の代表的な繁華街を巡る都市計画の《歩留まり》の少なさは、いったい何が原因なのでしょう。もつとも計画という言葉に改めて注意を払うようになったのは、昨年の三月二十日の新聞紙上で「イラクの自由」作戦の開始とともに、その指揮官で《軍人の中の軍人》と呼ばれているフランス米中央軍司令官が、好きな格言として「いかなる計画も最初に現実と遭遇した時に崩壊する」という言葉を述べていたのが印象的でした。これを都市計画に当てはめてみると、それは時間を固定する事と同じことです。いかなる完全な計画でも現実はずくに計画から分離していく訳です。ですから現在も泰明小学校の姿が残されていることは、当時の都市計画の《歩留まり》は、かなり大きいものとも言えます。(鈴木理生)